

予報第 3 号(7 月)

大 防 第 1013 号
平成 20 年 6 月 30 日

関係各位

大阪府病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について

標記について次のとおり発表したので送付します。

病虫害発生予報第3号(7月)

平成 20 年 6 月 30 日
大阪府病虫害防除所

農作物名	病虫害名	予想発生量
水稲	いもち病(苗いもち)	△～□
	縞葉枯病	□
	ニカメイチュウ	△
	セジロウンカ	□
	ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)	□
	イネアオムシ(フタオビコヤガ)	○
ぶどう	べと病	□
	晚腐病	□
	チャノキイロアザミウマ	△
	アメリカシロヒトリ	□～○

みかん	黒点病	□
	そうか病	○
	ミカンハダニ	△
もも	せん孔細菌病	□
いちじく	アザミウマ類	△
	イチジクヒトリモドキ	●
果樹全般	果樹カメムシ類	○
なす	すすかび病	△
	うどんこ病	□
	褐色腐敗病	□
	半身萎ちょう病	○
トマト	疫病	□
非結球アブラナ科葉菜類	コナガ	△
花き類	白さび病	□～○
	黒斑病・褐斑病	□～○
野菜・花き類	アブラムシ類	△
	ミカンキイロアザミウマ	△
	シロイチモジヨトウ	△
	ハスモンヨトウ	△
	オオタバコガ	□～○
	ハモグリバエ類	△
	コナジラミ類	△～□
▲:少ない △:やや少ない □:並 ○:やや多い ●:多い		

気象予報(大阪管区气象台6月27日発表)

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温(確率)	20	30	50

降水量	40	30	30
日照時間	20	30	50

A 水稻

【いもち病】

予報内容 発生量 : やや少ない～並

予報の根拠

(1)7月の降水量は平年並、日照時間は平年並かやや多いと予想されている。

(2)昨年度、予察ほ場での発生はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)置き苗が発生源になるので、早く処分する。

(2)天候の変化に注意し、発病を認めたら早期に防除を徹底する。

(メモ)

・低温、多雨、密植、窒素過多で発病が多くなる。

【縞葉枯病】(ヒメトビウンカ)

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

(1)予察灯への飛来は平年と同様見られなかった。

(2)4月のヒメトビウンカ発生量はやや多かったが、縞葉枯病保毒虫率検定では

平年同様保毒虫は見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)毎年多発するほ場では、ヒメトビウンカの防除を徹底する。

(メモ)

・本病はヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病で、7月上中旬に発生が

多い。

・生育初期に発病すると葉が「こより状」に巻いて垂れ下がる。

その後、7月下旬～8月上旬に枯れる。

・6月にアドマイヤー剤、プリンス剤を含む粒剤を箱施用した場合は、7月の防除は必要ない。

【ニカメイチュウ】

予報内容 発生量: やや少ない

予報の根拠

- (1)一部のフェロモントラップで誘殺虫数が見られたが、全体的には少なかった。
- (2)予察灯への飛来は平年同様見られなかった。
- (3)昨年度、予察ほ場での発生は少なかった。

防除上考慮すべき事項

- (1)発生が見られる場合には、パダン粒剤またはトレボン粒剤を施用する。
(メモ)
 - ・防除適期は7月上中旬である。但し、6月にプリンス剤を含む粒剤を箱施用した場合は、7月の防除は必要ない。

【セジロウンカ】

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

- (1)6月中旬現在、予察灯への飛来は平年と同様見られなかった。

防除上考慮すべき事項

- (1)異常飛来があった場合は、急激に密度が高まる恐れがあるので、今後のメールサービス等の病害虫発生予察情報に注意する。
(メモ)
 - ・セジロウンカの発生量は、近年やや増加傾向にある。

【ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)】

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

- (1)近年、府内北部・中部地域に発生地域が拡大しているが、被害程度の増加はやや鈍化傾向にある。
- (2)昨年度、府内での発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

- (1)水深4cm以下の浅水管理をする。
- (2)桃色の卵塊を水中へ掻き落とし、成貝は捕殺する。
(メモ)
 - ・田植後20日以内の苗が食害されるので、この時期の防除を徹底する。

【イネアオムシ(フタオビコヤガ)】

予報内容 発生量 : やや多い

予報の根拠

(1)昨年度、予察ほ場での発生はやや多かった。

防除上考慮すべき事項

- (1)発生初期の防除を徹底する。
- (2)プリンス粒剤の効果はやや低い。

B 果樹

1 ぶどう

【べと病】

予報内容 発生量:並

予報の根拠

- (1)6月後半までの巡回調査では、観測定点(デラウエア)での発生は見られなかったが、近隣の他品種ほ場(マスカット・ベリーAなど)では、発生が見られた。
- (2)例年、梅雨期に発生が見られる。

防除上考慮すべき事項

- (1)発病を認めたら、被害葉は速やかに取り除くとともに、初期防除を徹底する。

【晩腐病】

予報内容 発生量:並

予報の根拠

- (1)6月後半の巡回調査では、発生は見られなかった。
- (2)7月の降水量は平年並と予想されている。

防除上考慮すべき事項

- (1)着色遅れなどで、収穫が遅れると発生が増える恐れがある。

【チャノキイロアザミウマ】

予報内容 発生量:やや少ない

予報の根拠

- (1)6月前半の黄色粘着トラップへの誘殺虫数は平年よりやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

- (1)発生初期の防除を徹底する。

【アメリカシロヒトリ】

予報内容 発生量: 並～やや多い

予報の根拠

(1)6月下旬から一部のぶどう園で発生が見られた。

防除上考慮すべき事項

(1)収穫後のほ場でも発生する。

2 みかん

【黒点病】

予報内容 発生量: 並

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

(2)7月の降水量は平年並と予想されている。

防除上考慮すべき事項

(1)去年の多発園では、越冬菌量が多いので注意する。

(メモ)

・この病気は、枯枝上から雨滴によって広がる。

【そうか病】

予報内容 発生量: やや多い

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生がやや多かった。

(2)雨天が多く、十分な防除ができなかった園が多い。

防除上考慮すべき事項

(1)果実での発病を抑えるため、発生の多いほ場では、梅雨期の防除を徹底する。

(メモ)

・降水量が多いと発生が多くなる。

・風通しの悪い密植園で多発しやすい。

【ミカンハダニ】

予報内容 発生量: やや少ない

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生量はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

- (1)例年、梅雨明け後に多発する傾向があるので、初期防除に努める。
 - (2)殺ダニ剤の同一薬剤の連用を避ける。
 - (3)合成ピレスロイド系殺虫剤を使用している場合では増加しやすい。
- (メモ)
- ・ハダニ類は乾燥条件で多発する。

3 もも

【せん孔細菌病】

予報内容 発生量:並

予報の根拠

- (1)6月後半の巡回調査では、発生は平年並。
- (2)7月の降水量は平年並と予想されている。

防除上考慮すべき事項

- (1)初期防除を徹底する。

(メモ)

- ・風雨が強いと発生が助長される。

4 いちじく

【アザミウマ類】

予報内容 発生量:やや少ない

予報の根拠

- (1)6月前半の青色粘着トラップへの誘殺虫数はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

- (1)いちじくにおけるアザミウマ類の発生は、ほ場により大きく異なる。
- (2)防除薬剤として合成ピレスロイド剤を多用すると、ハダニ類が多発しやすい。

【イチジクヒトリモドキ】

予察内容 発生量:多い。

注意報発表(平成 20 年 6 月 13 日)

予報の根拠

- (1)羽曳野市、柏原市、高槻市のいちじく園で発生が確認されている。
また堺市内のイヌビワ等でも発生が確認されている。
 - (2)昨年よりも発生時期が早く、結果枝が食害を受けることにより大きな被害を受ける恐れがある。
- 防除上考慮すべき事項

- (1)本種は府内では昨年初めて被害が確認された害虫である。
(2)幼虫は若齢～中齢幼虫の間は群生して加害するため、幼虫が分散する前に寄生葉を取り除いて処分する。

5 果樹全般

【果樹カメムシ類】

予察内容 発生量: やや多い。

予報の根拠

(1)フェロモントラップの誘殺数がやや多かった。

防除上考慮すべき事項

(1)袋かけを行っている場合でも、果実が肥大して袋と密着した場合は袋の上からでも吸汁被害を受けることがある。

C 野菜類

【すすかび病】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: なす

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生は平年より少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)ストロビルリン系薬剤(アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル)に対する感受性が低下している。

(2)病葉は早めに摘除し、ハウス外に持ち出し処分する。

(3)初期防除が重要となるので、発病を認めた場合には、葉の裏にもかかるように丁寧に薬剤散布を行う。

(4)同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(メモ)

・すすかび病は多湿条件下や樹勢が低下したときに発生が多くなる。

【うどんこ病】

予報内容 発生量 : 並

寄主作物: なす、トマト

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、ハウスでは平年並の発生で、露地では平年

と同様に発生は見られなかった。

(2)7月の降水量は平年並、気温や日照量は平年並または多いと予想されている。

防除上考慮すべき事項

(1)こまめに摘葉、摘芯を行い、過繁茂にならないようにする。

(2)発生初期の防除を徹底する。

(3)樹勢が弱ると多発しやすいので、肥切れにならないように管理する。

(メモ)

・うどんこ病は、日照不足、乾燥条件下で多発する。

【なす褐色腐敗病】・【トマト疫病】

予報内容 発生量 : 並

寄主作物: なす、トマト

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生は平年と同様見られなかった。

(2)7月の降水量は平年並と予想されている。

防除上考慮すべき事項

(1)発病した枝や果実は、直ちにほ場外へ持ち出して処分する。

(2)初期防除が重要なので、発病を認めた場合にはすぐに防除を行う。

(3)降雨による泥のはね上がりを防止するために、マルチや敷きわらを行う。

【半身萎ちょう病】

予報内容 発生量 : やや多い

寄主作物: なす

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、一部のほ場で発生が見られた。

(2)泉州、南河内からも一部のほ場で発生の報告があった。

防除上考慮すべき事項

(1)地温 22～26℃の時期に発生しやすく、18℃以下の低温や 30℃以上の高温では発病しにくい。

(2)土壌湿度は乾燥よりも湿潤状態で発生しやすく、日照不足は発病を助長する。

(3)ナス科の作物を連作すると発生が増加する。

(4)罹病株は早めにほ場外に持ち出し処分する。

【コナガ】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 非結球あぶらな科葉菜類

(大阪しろな、こまつな等)

予報の根拠

(1)6月のフェロモントラップへの誘殺虫数は、やや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除を徹底する。

D 花き

1 きく

【白さび病】

予報内容 発生量 : 並～やや多い

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では、発生は平年並～やや多かった。

防除上考慮すべき事項

(1)発病した下葉は早めに取り除いて処分する。

(2)薬剤耐性菌を生じやすいので同一系統薬剤の連用を避ける。

(メモ)

・梅雨時期に発生が多くなる。

・薬剤散布は葉の裏にもかかるよう丁寧に行う。

・品種により耐病性に差が大きいので、作付品種により栽培管理に注意する。

【黒斑病・褐斑病】

予報内容 発生量 : 並～やや多い。

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では発生は見られなかったが、上旬の調査では発生が確認されており、病原菌は残っていると思われる。

(2)7月の降水量は平年並と予想されている。

防除上考慮すべき事項

(1)発病した下葉は早めに取り除いて処分する。

(2)降雨による泥のはね上がりを防止するために、マルチや敷きわらを行う。

E 野菜・花き類

【アブラムシ類】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1) 6月後半のなす巡回調査では、発生はやや少なかった。

(2) 6月の黄色水盤による誘殺虫数はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1) 少発生時の防除を徹底する。

(2) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(メモ)

・アブラムシ類は多種類のウイルス病を媒介する。

【ミカンキイロアザミウマ】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1) 6月後半の水なすの花たたきによる調査では、発生はやや少なかった。

(2) 6月後半の青色粘着トラップ(きく)への誘殺虫数は平年よりやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(2) 薬剤散布は葉の裏にまでかかるように丁寧に行う。

(3) ビニール等で畝をマルチングし、アザミウマが土中で蛹化するのを防ぐ。

(4) きくでは塊割れ(つぼみが割れてきて花弁が着色する状態)前後の防除を徹底する。

(5) 収穫後の残さは、他作物等への発生源となるので、速やかにほ場から持ち出し

処分する。

(メモ)

・ミカンキイロアザミウマは作物を吸汁加害するだけでなく、ウイルス病(TS WV)を媒介する。

【シロイチモジヨトウ】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1)6月後半のフェロモントラップへの誘殺虫数はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期(若齢幼虫期)に防除を徹底する。

(2)黄色蛍光灯を終夜点灯すれば、成虫の行動や産卵を抑制し、被害を軽減できる。

【ハスモンヨトウ】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1)6月のフェロモントラップへの誘殺虫数は、やや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期(若齢幼虫期)に防除を徹底する。

(2)黄色蛍光灯を終夜点灯すれば、成虫の行動や産卵を抑制し、被害を軽減できる。

【オオタバコガ】

予報内容 発生量 : 並～やや多い

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1)6月のフェロモントラップへの誘殺虫数は、平年並からやや多かった。

(2)6月後半のなす巡回調査では、発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)被害のあった新芽や果実は早期に処分し、周辺の幼虫を探して捕殺する。

(2)施設では、開口部を寒冷紗等(5mm 目合で可)で被覆し、成虫の侵入を阻止する。

(3)黄色蛍光灯を終夜点灯すれば、成虫の行動や産卵を抑制し、被害を軽減できる。

【ハモグリバエ類】

予報内容 発生量 : やや少ない

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1)6月後半の巡回調査では発生はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)被害葉や残さは、ほ場から持ち出し、ビニールで覆い、寄生幼虫を太陽熱で蒸し殺す。

(2)しゅんぎくや大阪しろな等の軟弱野菜では、収穫後に地表面をビニール被覆し、太陽熱により土中の蛹を殺すことで、次作の被害を軽減できる(4～10月の間可能)

【コナジラミ類】

予報内容 発生量 : やや少ない～並

寄主作物: 野菜類、花き類

予報の根拠

(1)6月の巡回調査では、発生は作目により異なり、なすではやや少ない、トマトでは平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除に努める。

(2)被害葉や残さは、ほ場より持ち出し、穴を掘って埋めるなどして処分する。

(3)施設では、開口部を寒冷しゃで被覆し、成虫の侵入を阻止する。

(4)同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(5)ほ場周辺の除草にも努める。

注1: 防除薬剤等詳しいことについては、大阪府農作物病虫害防除指針を参照。

注2: ローテーション散布とは、害虫の薬剤抵抗性、病原菌の薬剤耐性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤(例えば、有機リン系と合成ピレスロイド系など)を輪番に散布することである。

注3: 薬剤の散布にあたっては、収穫前の制限使用日数、使用回数について特に注意する。

農作物の病虫害に関する情報は

●病虫害発生情報メールサービス

申込先 大阪府病虫害防除所メールサービス担当

TEL 072-958-6551(内線232)

<情報料無料>

年間約40件の病虫害情報を電子メールで送付します。

●おおさかアグリメール

申込先 大阪府環境農林水産総合研究所(本部)

企画調整部技術普及課

おおさかアグリメール受付担当

TEL 06-6972-7666

最新の農業情報をあなたの携帯電話にお届けします。

(受信に要する通信費は自己負担です。)

●Web版大阪府園芸植物病虫害図鑑

「ひと目でわかる花と野菜の病虫害」

<http://www.epcc.pref.osaka.jp/afr/zukan/index.html>

(社団法人大阪府植物防疫協会)